

ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ (DPIA)

## インテリジェンス・ブリーフィング・モジュール 1 導入および歴史

グリア博士による口頭説明の要旨 (2024 年 3 月)

[ 文中の註 (\*) は訳者による ]

このモジュールは 2024 年 3 月に行なわれたライブイベントからの抜粋です。ここでは、スティーブン・グリア (Steven Greer) 博士の ディスクロージャー・プロジェクト (Disclosure Project) への関与とその原点について、詳しい説明が述べられています。とりわけ、博士の地球外知性体との平和的交流に向けた取り組み、彼が米国政府の諸機関から受けた様々な試練に焦点が当てられます。

スティーブン・グリア博士は、人類以外の知的生命体と平和的にコンタクトしようとする人々のグループを組織するため、1990 年に地球外知性体研究センター (Center for the Study of Extraterrestrial Intelligence; CSETI; シーセティー) を設立しました。このイニシアティブ (先導的取り組み) のもとに行なわれた、最初にして重要かつ成功裏に終わったコンタクトは、1992 年に起こりました。そのときグリア博士のグループは、フロリダ州の海岸で第五種接近遭遇 (Close Encounter of the Fifth Kind; CE-5) を実践していました (\*この事件のことは、スティーブン・グリアの著書 'Contact: Countdown to Transformation' に掲載されている)。この出来事は情報関係者の注意を引くことになり、その後彼らは、この活動を止めさせるためにグリア博士を脅迫しました。

この事件があってから、グリア博士は、彼のイニシアティブを阻止しようとする数えきれないほど多くの企みに直面しました。博士がそれを拒むと、軍や情報機関の高官たちがひっきりなしに彼の前に現れました。彼らは脅迫と、買収によって博士を彼らの秘密活動に引き入れようとする試みを、交互に繰り返しました。

1990 年代初期、グリア博士は米国政府関係者を教育し、彼らと協力し合うことを試みしました。その中にはビル・クリントン大統領や、ジェームズ・ウールジー CIA (中央情報局) 長官も含まれていました。彼ら二人は、地球外知性体に関する機密情報にアクセスすることを何度も拒絶されていたのです。グリア博士によって行なわれた会合の目的は、地球外知性体に関するプロジェクトの機密解除を提言し、米国政府内において地球外知性体に関する、より透明性のある議論を促進することにあります。

相当な抵抗にもかかわらず、グリア博士は取り組みを続け、結局それは、地球外技術および生命体に対する政府の秘密裏の関与を暴露する、ディスクロージャー・プロジェクトの設立につながりました。このプロジェクトは、部内者との秘密会合、議論を何度か行なうことにより勢いを増し、最終的に大きな社会的注目を集めることになりました。

このモジュールの幾つかの段落では、グリア博士がいわば“斬首された（無能化された）”米国の指揮系統と今なお闘っていることが、詳しく述べられています。そこでは、高位の当局者たちでさえ、地球外知性体問題に関しては完全に蚊帳の外に置かれています。博士が語る内容は、米国政府内に深く根差した秘密の層が、ある違法な闇のグループにより管理され、国の憲法の枠組みに影響を及ぼしていることを浮き彫りにしています。

**今や、誰でも法的処罰を受けることなく情報を暴露することが認められています。明るみに出されるプロジェクトは、違法であると見なされています。これらの違法プロジェクトに関連して機密扱いとされた情報は、どれでも持ち出すことができます。こうした機密化は、プロジェクトそのものが違法であるがゆえに、無効であると考えられるからです。**

**今や、内部告発を行なおうとする人は誰でも保護されます。この保護により、情報を持って名乗り出る際の以前の障壁は取り除かれました。暴露される情報には、物的証拠（遺体、金属片、等々）、文書、国家安全保障上の資格を欠くこうした隠れ犯罪組織が使用する手法などが含まれます。**

**これは、名乗り出ることを躊躇している人々に向けた行動要請です。彼らには身の安全が保証されていますので、隠れた無認可活動に対処し是正するために不可欠な情報を暴露することができます。**

モジュール 1 の文書一覧（順を追って）

1. #119830
2. #115247
3. #123900
4. #127538
5. #115190
6. #115197
7. カリフォルニア州アシロマ関連のビデオファイル
8. ビデオ #127589, #127590, #127591 へのリンク
9. #115330
10. #115243
11. #115099
12. #116965
13. #116969
14. #115434
15. #115483

16. #116656

17. #127525

**ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ (Disclosure Project Intelligence Archive; DPIA)**は、連邦議会や国家安全保障会議のメンバーだけのものではありません。このアーカイブは、この惑星に住む他の 80 億人の人々にも開放されています。

**地球外知性体研究センター (CSETI)** は、ディスクロージャー・プロジェクトの元になった親組織です。1990 年にスティーブン・グリア博士とその協力者たちにより始められた CSETI は、人類以外の知的生命体 (non-human intelligence; N.H.I.) すなわち地球外知性体との外交的で平和的なコンタクトを望み、かつその準備のできた人々を組織しようとしていました。

**第五種接近遭遇 (Close Encounter of the Fifth Kind; CE-5)** の最初のコンタクトは、1992 年 3 月、フロリダ州ペンサコラに近い海岸で成功裏に行なわれました。グループの人数は約 60 名、グリア博士と二人の空軍パイロットもこれに参加し、CE-5 のプロトコルを実践していました。彼らは 4 機の ET 輸送機が物質化し、出現したことを目撃しました。それらは写真に撮られ、フィルムにも収められました。

[文書 #119830 を見よ]

(\*Gulf Breeze, FL UFO 1992 #119830)

ET 宇宙機のうちの 1 機を捉えた写真がペンサコラ紙の第 1 面を飾ると、事態は広く世間に知れ渡りました。この出来事は、直ちに情報関係者の注意を引きました。彼らはグリア博士に接触し、この活動を止めるよう脅迫しました。グリア博士は即座に、断固としてこう述べました：“この問題に関して、私はあなた方の権限を認めません。私たちは皆、宇宙市民です。私たちがこの活動を、平和的な外交官として行なっているのです”

この精神こそが、CSETI とディスクロージャー・プロジェクトの核心にあるものです。

この断固たる拒絶の後、1992 年 4 月に、グリア博士は当時の特殊部隊および陸軍情報部の責任者**アルバート・スタッブルバイン (Albert Stubblebine)** 将軍から、ジョージア州アトランタでのある会議に呼ばれました。スタッブルバイン将軍は NSA/CIA (国家安全保障局/中央情報局) の職員でもありました。彼はグリア博士に、ただ会合に参加するだけだと思込ませていました。しかし実際に行ってみると、グリア博士は将軍と共にその会議のメインテーブルに着座させられたのです。

その後、グリア博士はあるホテルの一室に連れていかれ、単刀直入に CE-5 プロトコルの実践を中止するように言われました。それは決して楽しい会合ではなかったため、グリア博士は、法の規範を全く気にかけないある闇のグループがこの脅迫作戦を実行しているのだと結論するに至りました。つまり彼らは、人々の基本的人権など考えず、殺人をさえも

平気で実行する輩なのだと。それがまさに、グリア博士が彼らの態度から感じ取ったことでした。

1992年5月、アポロ宇宙飛行士の**ブライアン・オリアリー (Brian O'Leary)** 博士と、平和部隊 (\*1961年3月にケネディ大統領により創設されたボランティア計画) 共同創設者の一人である**モーリー・アルバートソン (Maury Albertson)** 博士が、コロラド州フォートコリンズ近郊のロッキー山脈の町エステスパークの、キャンプ・サン・マロ (カトリックの保養施設) にグリア博士を招待しました。このイベントにはスタッブルバイン将軍たちも参加しており、グリア博士の言葉を借りれば、将軍は“グッド・コップ” (\*善玉警察官、懐柔役) になることを決めていたようでした。スタッブルバイン将軍が直接グリア博士に20億ドルを提示し、CE-5の取り組みを止めて彼のチームに加わるよう提案したのは、この場所でした。

冷戦終結後のことで、彼らは東ヨーロッパから押収した巨額の資産や資金を確保していました。スタッブルバイン将軍は、その完全な管理権とアクセス権をグリア博士に与えると提案したのです。グリア博士は拒否しました。するとスタッブルバイン将軍は、グリア博士の妻に接近し、同じ提案をしました。つまり、博士が彼らのチームに加わるように、何とか説得してほしいと彼女に頼んだのです。その時点でグリア博士は、議論の余地はないと明言しました。

情報関係者からのこの厳しい洗礼を受けたグリア博士は、CE-5コンタクトを続けていく平坦な道はないと固く決心しました。コンタクトが平和的に起こることを望まない輩からの妨害が、これからも続くだろうことは明らかでした。

こうして、この成功裏に行なわれた最初のCE-5コンタクトを原点として、ディスクロージャー・プロジェクトは始まったのです。1992年から2001年にかけて、グリア博士と彼のチームは、ひっそりとプロジェクト・スターライト (Project Starlight) を立ち上げました。このコードネームの名付け親は、**ビル・クリントン (Bill Clinton)** 大統領のCIA長官であった**ジェームズ・ウールジー (R. James Woolsey)** とグリア博士の最初の会合を設定した人物でした。

[[文書 #115247](#) を見よ]

(\*President Bill Clinton - Project Starlight Coalition June 4, 1995.pdf)

DPIA (ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ) には、1993年1月、クリントン大統領 (\*1993年1月20日、第42代米国大統領に就任) の友人たちが大統領を説得しようとしたことに触れた文書があります (\*Rockefeller Initiative Lifting Secrecy on ET Intelligence Letter to President Bill Clinton 1993.pdf)。彼らは大統領に対し、この問題に真剣に取り組むこと、プロジェクトやこれらのプログラムの機密解除を行なう大統領令を発すること、情報を公開した上で、それに合法的かつ合憲的なやり方で対処することを求めました。

クリントン政権のとて最も早い時期に、グリア博士はアーリントン研究所 (\*シンクタンク) の**ジョン・ピーターセン (John L. Petersen)** 所長から連絡を受けました。彼はフェデックス (FedEx) で送った手紙の中で、こう書いていました： クリントン大統領とウールジーCIA 長官は二人とも問い合わせをしたが、いずれもアクセスすることを拒絶され、情報を得ることができなかった。

1993 年のその時期に、プロジェクト・スターライトが始まりました。その目的は、この問題についてホワイトハウスや連邦議会の関係者を教育することにより、彼らがそれらのプログラムに侵入し、機密を解除し、市民に情報を与えるための積極的な行動を起こせるようにすることでした。

この時期、グリア博士に**海軍情報部 (Naval Intelligence)** のある人物が接触してきました。最初はグリア博士も警戒しましたが、その人物はきわめて協力的で、彼もまた情報が公開されることを望んでいました。彼は、国防総省や CIA の相当な地位にある高官たちにも働きかけを行なったが拒否されたと語り、支援を申し出ました。

1993 年 7 月、グリア博士はバージニア州にある**モンロー研究所 (Monroe Institute)** での会合に出席しました。これには国務省に身を置く CIA 秘密工作員 **C・B・スコット・ジョーンズ (C.B. Scott Jones)**、やはり博士に支援を申し出ている一人の軍事顧問、その他何人かの利害関係者も出席していました。この会合の目的は、行政府、国防総省、軍との調整を図り、グリア博士の CE-5 コンタクト活動と軍事作戦との間の “衝突回避 (deconflict)” を行なうことでした。双方は互いに干渉を避け、この問題について知るべき立場にありながら意図的に情報へのアクセスを拒否されていた人々に対し、情報を提供したいと考えていたのです (\*高出力のライトやレーザー装置を使う CE-5 コンタクトの現場には、どこでも常に軍のジェット機、ヘリコプター、等々が接近してきたように思われた。グリア博士は偶発的な発砲を確実に防止し、CE-5 チームの安全を守ることを願っていた)。

1992 年から 1993 年にかけて、グリア博士は国防総省やホワイトハウスの最高階層につながる高官や人物たちに会いました。博士はまた、**ケビン・フォーリー (Kevin Foley)** とその兄弟にも会いました。彼らはクリントン大統領の親しい友人であり、ホワイトハウスに滞在したこともありました。

これらすべてのことが水面下で進行している間に、クリントン大統領がこの問題に踏み込み問い合わせをしたところ、元大統領であり CIA 長官でもあった**ジョージ・H・W・ブッシュ (George H.W. Bush)** (\*ブッシュ・シニア) 率いる、政府の秘密プログラム責任者たちから、脅迫を受けていたことが明らかになりました。ブッシュは前面に出てきて、手を引けとクリントンに告げ、こう言いました：“これは君には関係ないことだ”

DPIA (ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ) には、匿名を希望するある人物からの最近の宣誓陳述書が含まれています。彼は多くの著名人の代理人を務める、有名

なエンターテイメント・エージェントです。彼はクリントンと一緒にリムジンに乗っていたとき、元大統領からこの話を聞かされました。

[[文書 #123900](#) を見よ]

(\*Witness #10963 United States testimony May 2023.pdf)

この時点で、私たちが深刻な憲法上の危機にあることは明らかでした。大統領、連邦議会議員を含む米国の指揮系統は、実質的に“斬首された（無能化された）”状態にありました。グリア博士が連邦議会への本格的な働きかけを開始したのは、1993年の夏になってからでした。

1993年9月、グリア博士は**ローランス・ロックフェラー (Lawrence Rockefeller)** から、ティトンのロックフェラー牧場 (\*ワイオミング州) に招待されました。この会合にはビゲロー航空宇宙会社の**ボブ・ビゲロー (Bob Bigelow)** や**ジョン・マック (John Mack)** 博士らも参加していました。他の参加者たちは知りませんでした。ローランス・ロックフェラーは切迫感を持ってこの集まりを招集していました。彼は、新大統領にこの問題に取り組んでもらうことを熱望していました。グリア博士はその重要性を理解し、招待を受け入れました。

[[文書 #127538](#) を見よ]

(\*Dr. Steven Greer at the Rockefeller Ranch group photo.pdf)

他の人々が気付いていなかったのは、グリア博士と彼のチームがすでに舞台裏で動いており、大統領、国防総省、CIA に接触していたということでした。これは、当時ローランス・ロックフェラーも知らなかった情報でした。グリア博士が、この会合が終わったら、CE-5 コンタクトチームの活動と国防総省の作戦を調整するつもりだと述べると、参加者たちの間には明らかな驚きが広がりました。

当時、統合参謀本部情報局長であった**クラマー (Cramer)** 提督は、空軍および空軍情報局の責任者に対し、グリア博士、彼の軍事顧問、C・B・スコット・ジョーンズと面会するよう命じました。グリア博士はジョーンズを元国務省職員だと思い込んでおり、彼が実は内部に潜入した諜報員であることには気付いていませんでした。

会合の場所は**ライト-パターソン空軍基地** (\*オハイオ州デイトン) で、当時そこは外来航空宇宙科学技術センター (Foreign Aerospace Science Technology Center; FASTC) と呼ばれていました。もともとの施設は空軍の外来技術部 (Foreign Technology Division; FTD) で、1947年のロズウェルなど、初期の墜落した ET 輸送機や遺体が送られたのはこの場所です。時は流れて、今や1993年でした。

グリア博士は**ブルース・アシュクロフト (Bruce Ashcroft)** および**カノラ (Kanola)** 大佐と面会しましたが、彼ら二人は、グリア博士が彼らの作戦について情報を収集し、探りを入れることが目的だと考えていました。この疑念から、彼らは当初、空軍情報局長からの面会要請を拒否しました。空軍情報局長は、そのことを統合参謀本部情報局長のクラマ

一提督に伝えました。クラマー提督は“この面会を受けろ！”と強く言い、彼らの決定を覆しました。彼らは指揮系統の上位にあった提督の命令には従わざるを得ませんでした。

会合でグリア博士は、基地での作戦について聞くことには興味がない、なぜならすでに十分な情報を持っているからだと言われに伝えました。1993年9月までに、彼にはその部隊で働き、初期の墜落回収に関わった内部協力者がいました。このネットワークは1992年から1993年の間に急速に確立されたものでした。

諜報将校たちはただグリア博士を見つめるばかりで、一人の将校が猛烈な勢いですべてを記録していました。グリア博士は、自分が来た目的は、平和的なコンタクトを行なおうとする自分たちの取り組みと軍の作戦を調和させるためであり、また彼らに妨害行為を止めよう要請するためだと説明しました。彼らの妨害には、CE-5を阻止するためにジェット戦闘機や特殊部隊を派遣することが含まれていたからです。こうしたことが、この難しい会談がお膳立てされた背景でした；将校たちは、当初の抵抗にもかかわらず出席を強制されたため、明らかに苛立っていました。

グリア博士がロックフェラー牧場を出発する前夜、彼と、当時80代で一族の“哲人王（Philosopher King）”と見なされていたローランス・ロックフェラーは、テラスに出ました。夜も更け、他の人々はすでに就寝していました。二人は深い会話を交わしました。ローランスの弟は、チェース・マンハッタン銀行（現J・P・モルガン・チェース）の**デービッド・ロックフェラー（David Rockefeller）**、甥は上院情報委員会委員長の**ジェイ・ロックフェラー（Jay Rockefeller）**上院議員でした。二人とも秘密プログラムに“読み込まれて（read into）”おり、ローランスがグリア博士とこのような会合を開いていることに激怒していました（\*ある区画化プログラムに‘読み込まれる’とは、そのプログラムについての説明を受け、機密保全誓約に署名することにより、その機密情報にアクセスする資格を与えられることを意味する）。

会話の中で、ローランスはグリア博士のディスクロージャー（情報公開）に向けた取り組みの進展状況を訊ねました。グリア博士は、自分は公的地位も、富も、政治的影響力もない、一介の救急医にすぎないと説明しました。そして、ローランスこそがその年齢、富、ロックフェラー家の一員という地位からして、この仕事に相応しいと提案したのです。ローランスは笑いながら、こう答えました：“私はそれを進めることができません。なぜなら、弟と甥が、私が君とこうして会っているということだけで、すでに私を激しく非難しているからです！”

グリア博士が最善の進め方を訊ねると、ローランスは、舞台裏でなら動くことができると提案しました。当初グリア博士は、ローランスが先導することを提案しているのだと考えましたが、彼はグリア博士自身が先頭に立つべきだと明言しました。

グリア博士は、週 100 時間のスケジュールをこなすフルタイム救急医としての責務や、家族への責任を挙げ、難色を示しました。これらの懸念にもかかわらず、ローランスは、このイニシアティブを率いるのはグリア博士でなければならないと主張しました。

それぞれの役割について短いやり取りをした後、グリア博士は、相当な支援が必要であることを強調した上で、この困難な仕事を引き受けることに同意したのです。この合意の後、ローランスはグリア博士の初期のディスクロージャー（情報公開）活動や会合を、資金面で支援し始めました。その詳細が、添付文書に詳述されています。

[[文書 #115190](#) を見よ]

(\*Letter to Dr. Steven Greer from Laurance Rockefeller via George Lamb - 1995.pdf)

ロックフェラー牧場とライト-パターソン空軍基地での会合から数箇月後、グリア博士はジェームズ・ウールジーCIA 長官へのブリーフィング（状況説明）を準備しました。当初 11 月に予定されていたブリーフィングは、12 月に延期されていました。

アーカイブには、グリア博士に送られたフェデックス（FedEx）の中で具体的に言及している文書が含まれています。そこには、CIA 長官も大統領も情報へのアクセスを許可されていないと述べられていました。さらに、その文書は、グリア博士がこの件について政権にブリーフィングを行なう最初の人物になるであろうことを強調していました。

[[文書 #115197](#) を見よ]

(\*Letter to Dr. Steven Greer from John Peterson re (James Woolsey former CIA director) December 3, 1993.pdf)

その文書を読んだグリア博士は、全く馬鹿げていると言い、その考えを退けました。一民間人にすぎないノースカロライナの救急医が、大統領や CIA 長官よりも多くの情報を持っているなどとは信じがたいことだったのです。しかし、実際にはそのとおりでした。グリア博士は当初、これは CIA 長官による策略ではないかと疑いました。長官は抜け目のないスパイ組織の首領であり、博士が国防総省やその他の分野で指揮系統の上層部に問題を提起していることを知った上で、彼から情報を引き出そうとしているのではないかと考えたのです。

どうやら彼らは、本当に何の情報も持っていないようでした。グリア博士の当初の推測では、その文書は単に彼が知っていることのすべてを明らかにさせるための戦術にすぎないというものでした。彼は、文書、証拠、情報の詰まった大きなブリーフケースを会合に持参しました。

彼が写真やその他の資料を見せ始めると、ウールジー長官は彼を制止し、それらが本物であることはすでに知っているのを見る必要はないと述べました。ウールジーと彼の妻は、1960 年代に目撃体験をしており、それが通常の推進力で飛ぶ航空機ではないと確認できるほど近距離での遭遇だったことが分かりました。

グリア博士は訊ねました：“では、何について話し合いたいのですか？”

会合は、**ジョン・ピーターセン**宅での夕食会として慎重に手配されました。表向きの理由は、3組の夫婦のための夕食会というものでした：グリア博士夫妻、CIA 長官夫妻（妻の**スー・ウールジー (Sue Woolsey)** 博士は、米国科学アカデミーの最高執行責任者でした）、そしてジョン・ピーターセン夫妻です。

グリア博士は、ウールジー長官が情報収集の一環として単に情報の引き渡しを受けるだけの、比較的短い会合になると予想していました。しかし、この会合はウールジー長官に深い影響を与えました。彼はグリア博士に心情を吐露し、状況を非常に不気味なものだと表現した上で、グリア博士が提供できるすべての情報を受け取りたいという希望を述べました。グリア博士は情報を提供することに同意しました。

議論はほぼ3時間に及びました。このアクセス拒否が深刻な問題であることは明らかでした。彼らは多岐にわたるテーマについて話し合いましたが、ウールジー長官は特に、翌週に予定されていた閣僚向けインテリジェンス・ブリーフィング（\*国家安全保障上の観点から情報を収集・分析し、政府や首脳に行なう報告）のために、この後のテーマに強い関心を持っていました。

彼は、誰がなぜこのような秘密を守っているのかについて知りたがっていました。彼自身、そうした秘密の活動については全く知らなかったからです。レーガン大統領のもとで第一次戦略兵器制限交渉（SALT I）の軍備交渉官を務めた経験があるにもかかわらず、彼はなぜこれほどの機密が維持されているのかを知りませんでした；その機密は、大統領、彼自身（CIA 長官）、国家安全保障会議（NSC）の上級メンバーさえもアクセスを拒否されるという、違法かつ認可されていない作戦につながっていたのです。

海軍情報部の軍事顧問から情報を得ていたグリア博士は、同じ状況が国防総省のカウンターパート（\*同等の地位にある人々）にも影響を及ぼしていることを知っていました。彼がこれをウールジー長官に伝えると、長官は愕然としました。グリア博士の最初の重要な洞察、つまり誰もが徹底的に理解すべき最初のデータポイント（\*調査で引き出された実際の情報）は、ネット上の噂話や陰謀論からではなく、1992年から1993年にかけて行なわれた実際の会合から得られたものです。これらの議論は、次のことを証明していました：

**米国の指揮系統は、斬首された状態にある（無能化されている）。**

大統領、連邦議会、国防総省の主要な高官、そして政治的に任命された CIA 長官の全員が、きわめて重要な特定情報へのアクセスを拒否されていたのです。

しかし、状況は当初の見かけよりもさらに複雑な意味合いを含んでいます。例えば、この情報に関する知識は、歴代の CIA 長官によって異なっていました。ジョージ・H・W・ブッシュ（\*ブッシュ・シニア）はこれらの詳細を知っていましたが、他の長官たちは知りませんでした。同様の不一致は、国防総省内の CIA ともいべき国防情報局（DIA）内にも存在します。そこでは一部の長官は知らされ、他の長官は知らされていません。この知識の選択的配分は、統合参謀本部情報局（J2）の特定の責任者にも当てはまり、さらに様々な上院議員や下院議員にも及んでいます。つまり、ある者は“蚊帳の内”にいて、ある者はそうではないのです。

1990 年代初期に得られたもう一つの**重要な洞察**は、情報を流布するための構造化された方法に関するものでした。初めに、個人は機密保全誓約（Non-Disclosure Agreement; NDA）および最高機密／機密区画化情報（Top Secret / Sensitive Compartmented Information; TS/SCI）取扱許可の下で、少量の情報を受け取ることがあります。その後、監視者がその個人の反応を観察し、適切と判断すれば、それ以上のアクセスへの適性、特に秘密を守る能力を判断するための心理分析を行ないます。秘密が機密性の高いものであればあるほど、それが漏洩する可能性は高くなるからです。

もしその個人が情報を漏らすかもしれないという兆候があれば、その後の昇進にかかわらず、それ以上の詳細な情報が共有されることはありません。この方針は、CIA 長官、米国大統領、あるいは上院情報委員会委員長といった高官を含む、すべての人に適用されました。

連邦議会議員、ホワイトハウス、国家安全保障メンバー、および一般市民にとって重要な洞察となる、もう一つの主要な教訓は以下のとおりです：

**アクセス権（アクセスできるかどうか）の基準は、その人物が違法かつ認可されていないプログラムに従う意思があるかどうかです。**

もしその個人に参加する意思がなければ、単にそれ以上は知らされなくなるだけです。これらの作戦の初期段階では、秘密プログラムを知っていてかつ従うことを拒んだ個人が、深刻な結果に直面した事例がありました。彼らは殺害（terminate）されました。その顕著な例が**ジョン・F・ケネディ（John F. Kennedy）** 大統領です。

1950 年代から 1960 年代初期にかけて、決定的な瞬間が訪れました。秘密プログラムを運営する闇のグループは、特定の問題に関して、大統領や連邦議会議員を含む行政機関がその情報にアクセスしようとしたり、それを管理しようとした場合には、それを阻止すると決めたのです。通常これらの当局者が情報を強く求めた場合、彼らは即座に拒否されるか、偽情報（disinformation）によって誤った方向に誘導されました。

後のモジュールでは、この秘密がどのように維持されているのか、そして情報の管理と機密性を保つためにどのような手法が用いられているのかについて、詳細に論じます。すべ

ての人々にとって重要なのは、これらの手法とその運用を理解することです。というのも、これが機密保持のパターンを認識する助けとなるからです。この現象はどこか一国に固有のものではなく、世界的に行なわれている慣行です。

1993年12月のウールジーCIA長官との非常に友好的な会合の後、グリア博士は収集できるすべての情報を共有することを約束しました。これに対しウールジーは、さらに詳細な情報を掘り起こすことを確約しました。1994年初期までに、ウールジーは自身が集めたCIA文書の詰まった大きな箱を、グリア博士に送りました；現在、これらの文書はすべてアーカイブに保管されています。これは相当な量のコレクションであり、その多くは以前には一度も公開されたことのないものでした。

ウールジーは何とか情報を回収し、グリア博士と機密情報を共有しましたが、その後、距離を置くようになりました。数年間の在任期間を経て、ウールジーはCIA長官の職を退きました。

その後、彼とピーターセン氏、そして彼らの妻たちは、会合があったこと自体を公に否定し、グリア博士を単なる嘘つきではなく“大嘘つき (damn liar)”だと決めつけました。

これが、グリア博士にとっての“ワシントンへの入門”となりました。

この秘密主義の世界に足を踏み入れたグリア博士は、人が嘘をつくことに慣れていることを知りました。会合があったことを否定する動きは迅速でした。それは、ウールジーCIA長官が影響を受け、説得され、多額の金銭を提示されてこの問題を否認し、主導権を握る違法な秘密プログラムを支持するようになったためだと思われました。

しかし、クリントン大統領はブリーフィングの後も数年間この問題を追求し続け、これらの秘密プログラムに浸透するために、いわゆる**チーム・レッド (Team Red)** を設立しました。明確にしておきますと、**チーム・ブラック (Team Black)** は違法なプロジェクトを指し、**チーム・ブルー (Team Blue)** は米国の合法的なプロジェクトを表します。

チーム・レッドは、明確にチーム・ブラックに潜入するために組織されました。悲劇的なことに、チーム・レッドのメンバーはその殆どが殺害されました。“ウェットワーク (wet works)”によって“消去 (erased)”されたのです。“ウェットワーク”とは暗殺を意味する用語であり、流血を伴うことに由来します。排除されなかった者たちは、様々な**懐柔策**によって取り込まれました。

グリア博士がCIA長官と会う1箇月前、アリゾナ州フェニックスで、デジタル画像分析者の**ジム・ディレットソー (Jim Dilettoso)** との重要な出会いがありました。ディレットソーは、U2 (\*ロックバンド) のボノ (Bono) を含む、大規模なデジタルスタジオ・プロジェクトを多く手掛けたことでも知られており、デジタル音楽界の著名人でした。

重要なことですが、秘密の違法プログラムに関与している人々は、CIA、国防総省、JSOC (Joint Special Operations Command; 統合特殊作戦コマンド)、あるいはロッキード・スカンクワークスといった組織の NOC (non-official cover; 政府から保護されない非公式諜報員) であることを公然と名乗ることはありません。

連邦議会議員や市民は、この現実を認識する必要があります。これは、グリア博士が関わり始めた初期の数年間で知るに至ったことです。

グリア博士はジム・ディレットソーとは 1, 2 年の面識がありましたが、その頃に彼からリグリー・マンションに招待されました。フェニックス (\*アリゾナ州の州都) の砂漠の丘陵地帯にあるこの広大な邸宅は、もともとチューインガムで知られるリグリー家によって建てられたもので、後にホームル・フーズ (\*ミネソタ州オースティンに本社のある米国の食品加工会社) のジョーディ・ホームルが取得していました。ディレットソーは資産を運用する際、このマンションを作戦センターとして使用していたのです。

その日の夜遅く、ディレットソーはグリア博士を、スーツ姿の人々が大勢いる大きな会議室に招き入れました。ディレットソーは、グリア博士が予定していた CIA 長官との会談に関する通信をすべて傍受していたと明かしました。彼はグリア博士に対し、大統領や CIA 長官と会う必要はないと言いました。なぜなら、彼らはこの問題について何も知らされておらず、今後も知らされることはないからだということです。

ディレットソーは、もしグリア博士がこの問題を理解したいなら、代わりに自分たちのグループと話すべきだと勧めました。彼は、自分たちがすべての “他から頼まれた仕事 (work-for-others; **WFO**) ” の契約プロジェクトを管理し、世界中の金融システムのスーパーコンピューターをサポートし、さらにイエズス会の特定の修道会が関与する技術移転プログラムを担当している旨を説明しました。

陸軍情報部トップのように 20 億ドルを提示する代わりに、ディレットソーは、グリア博士が望むだけの枚数のプラチナ・クレジットカードを作れば、彼らが毎月その残高を清算し、無制限に使えるようにすると提案しました。ディレットソーは、これを手配する能力が自分たちにはあると断言し、それは絶対的な事実だと述べました。

グリア博士は、その提案を受け入れれば彼らの所有物になってしまうと説明し、断わりました。ディレットソーは彼の背中を軽く叩き、自分たちは助けるためにここにいるのだと主張して安心させようとしていました。しかし、グリア博士は警戒していました。そのような “助け” が後になって脅迫材料として利用され、銀行詐欺の告発や利息による莫大な借金を背負わされる可能性があることに気付いていたからです。彼は断固として、そのようなことはさせないと述べました。

これは、彼を従わせようとする新たな試みでした。これらのエピソードは、人々を操り、こうした秘密組織に引きずり込むために使われる手口とはどのようなものなのかを理解するために、きわめて重要です。

人々はしばしば、**直接的な脅迫**、**家族への脅迫**、彼らが握った（あるいはディープフェイクで捏造された）弱みとなる情報を使った**恐喝**によって誘い込まれます。AI 技術は最近になって一般に知られるようになりましたが、闇の作戦では何十年も前から使用されていたことは注目に値します。彼らはまた、権力のある地位や金銭的なインセンティブ（誘因）といった**利益供与**を用いて、人々を動かそうとします。

これが組織の手口であり、グリア博士はそのことを 1992 年から 1994 年という短くも啓発的な期間に、身をもって体験しました。この期間が終わる頃には、彼はこの問題に取り組む上で直面するであろう困難の大きさを理解していました。

このような困難にもかかわらず、グリア博士と彼のチームは前進することを決意しました。彼らは、前進するための決定的に重要な戦略は、初期の証人や内部告発者を集めることであると結論付けました。これは、1993 年から 1995 年にかけてそのような活動がニュースで広く報じられるようになる前のことでした。

彼らは**プロジェクト・スターライト**を立ち上げ、大統領や主要な連邦議会議員の前で情報を提示できる人々を、用心深く集め始めました。その目的は、法的行動を起こすのに十分な具体的情報を伴った、正式のディスクロージャー（情報公開）を目指すことでした。

この取り組みの中で、グリア博士は言葉を広め、静かにネットワークを構築し始めました。

アーカイブに記録されている最初の会合は、1995 年 6 月にカリフォルニア州モントレイ市エサレンの近くにある保養地、アシロマで開催された**アシロマ集会（Asilomar gatherings）**です。グリア博士がこのイベントを主催し、約 10 名の最高機密関係者が集まりました。

出席者の中には、ロズウェル回収事件の当初の参加者や、ソ連の宇宙飛行士**マリーナ・ポポーヴィッチ（Marina Popovich）**がいました。彼女の夫で、米国のニール・アームストロングに匹敵する**パーヴェル・ポポーヴィッチ（Pavel Popovich）**もまた、目撃と遭遇を経験していました。会議の様子はすべてアマチュアのボランティアによって録画されたため、画質は最良とは言えないものでした。

これらの作戦を取り巻く陰謀をさらに深く掘り下げると、民主党の著名な資金調達者でありクリントン大統領の友人でもあった**ケビン・フォーリー**が、影響されてこの活動を妨害しようとしていたことが分かりました。フォーリーは、週末にかけて録画されたすべての映像をボランティアから何とか奪い取り、姿をくらましました。フォーリーは当初、長髪

でバンに乗った、ある種のニューエイジや UFO 愛好家のように見えてましたが、実際には  
作員でした。

それから 26 年後のこと、グリア博士はミネアポリス・セントポール都市圏（ミネソタ州）  
のマーティン・ケラーからメールを受け取りました。ケラーは初期の頃に関与しており、  
執筆や広報を手伝っていました。また、同じミネソタ州出身のケビン・フォーリーとも連  
絡を取り合っていました。

年を重ねるにつれ、フォーリーは認知症の兆候を見せ始めました。ケラーとの会話の中で、  
彼はアシロマ集会のテープをすべて持っており、それをタイムカプセルに入れて自宅の裏  
庭に埋めたことを明かしました。26 年間の凍結と解凍に耐えた後、テープはフォーリーに  
よって掘り起こされてケラーに渡され、その後グリア博士の元へと送られました。これら  
のテープは現在、アーカイブに保存されています。

[Asilomar CA で検索されたい]

(\*Asilomar, CA 1995 Dr. Steven Greer Meeting with high level Military and  
Government Witnesses and Astronauts Video 1 of 14.mp4 ~ Video 14 of 14.mp4)

26 年間失われていたこのアシロマ会議は、カメラの前で自身の話を共有する意思のある内  
部告発者が初めて集まった場であり、大統領や、グリア博士が接触できる選ばれた連邦議  
会議員たちに、重要な情報を提供するものでした。**それは歴史的な出来事でした。**

その経験から、グリア博士は“信頼”に関するもう一つの**重要な教訓**を導き出しました。  
脅迫、恐喝、金銭、あるいは権力の約束によって買収された人間は、大義を裏切るとい  
うことです。当初、世界の仕組みについて世間知らずだったグリア博士は、自身の活動にお  
いてより一層の注意を払う必要があることを悟りました。

1995 年から 1996 年にかけて、グリア博士はホワイトハウス内の協力者たちから、大統  
領がこれ以上の調査を追求することを断念させられたと知らされました。もし相手が 2 期  
務める大統領であるならば、2001 年 1 月までこの状況が続くことになります。グリア博  
士はその意味するところを熟慮し、次のステップについて考えざるを得なくなりました。

時は流れて 1997 年、グリア博士は別の重要なイベントを組織しました。彼は約 20 名の  
内部告発者をワシントンに集め、連邦議会議事堂から少し離れたジョージタウンのウェス  
ティンホテルで、私的なブリーフィングを開催しました。これらの人々は、この目的のた  
めに様々な場所から飛行機で呼び寄せられました。その後亡くなった**トニー・クラドック**  
(**Tony Craddock**) が、簡単な家庭用ビデオカメラでその進行を記録していました。  
失われたと思われていたこれらの記録は、後に再発見され、現在はアーカイブに保管され  
ています。

[文書 (ビデオ) #127589, #127590, #127591 を見よ]

(\*Washington DC part 3 April 10 1997 AJC, Washington DC part 2 April 9-10  
1997 AJC, Washington DC part 1 April 9, 1997 AJC United States)

録画は、議論の様子を生のまま、編集なしで伝えています。音質や画質は悪いものの、進行を記録しており、グリア博士の主張を裏付けるものとして貴重です。

参加者が互いの親睦を深めるために一日を費やした集会の後、翌日の夜には、**ダン・バートン (Dan Burton)** 下院議員を含む連邦議会議員を招く予定になっていました。この一連の出来事は、立法府のメンバーに関与し、自身が発見したことを知らせようとするグリア博士の継続的な努力を物語っています。

1997年4月当時、下院監視委員会の委員長であったバートンは、この問題に強い関心を持っていました。というのも、彼のオフィスの親しい友人の一人が、窓から至近距離で宇宙機を目撃していたからです。

バートンはこれらの現象が現実であることを確信していましたが、その地位にもかかわらず、それ以上の情報にはアクセスできませんでした。その結果、他の多くの人々がそうであるように、彼はグリア博士に接近し、自分が問い合わせをしても一貫して嘘をつかれ、蚊帳の外に置かれていると、嘆きながら不満を漏らしました。

グリア博士は、彼が機密情報から除外されているのは、彼が正直な人物だと見なされており、市民に真実を話す可能性が高いからだと説明しました。真実の共有は、秘密の管理者たちにとりリスクと見なされていました。なぜなら、それはジャック・ケネディの場合と同じ結果を招く可能性があったからです（\*マリリン・モンローが記者会見を開き、ケネディ大統領が彼女に外宇宙起源の物体について語ったことを公表しようとしていたと述べているCIA文書が、アーカイブに収録されている）。

このような“難しい話し合い (difficult conversation)” は必要なものでした。グリア博士は、議会が召喚状を伴う公聴会を組織すべきだと提案しました。そこでは証人が宣誓の上で証言し、文書や情報を提示し、もし嘘をつけば連邦法の偽証罪に問われることとなります。

しかし、これは実現しませんでした。当時、議員たちの関心は今日と同様に好奇心によるものでしたが、この問題に関連する社会的スティグマ（汚名、烙印）のために、深く関与しようという意欲はさらに低いものでした。彼らは現実を疑っていたわけではありません；むしろ、“変人” や陰謀論者などの話題と見なされていた問題に取り組むことで生じる、政治的な嘲笑に直面することを嫌がったのです。

それは政治的リスクであり、この問題に深入りした者がメディアによって厳しい嘲笑の対象になることを、彼らは経験から知っていました。

**大手メディア**は、秘密を維持しようとする情報関係者からの腐敗した利権によって完全に影響されています。このことはあらゆる政治的スペクトラム（政治的な立場）に当てはま

り、これを理解することは、70年から80年間にわたりどのようにして秘密が維持されてきたのかを把握するために、きわめて重要です。

グリア博士は、この問題について議員たちに関与してもらおうべく熱心に活動しました。彼が会った中には、エリア 51 やネリス空軍基地といった有名な場所があるネバダ州選出の**ディック・ブライアン (Dick Bryan)** 上院議員がいました。ブライアン上院議員はこれらの問題について一度もブリーフィングを受けたことがなく、自分が除外されている理由についても知りませんでした。

[[文書 #115330](#) を見よ]

(\*Dr. Steven Greer letter to Senator Bryan (Nevada) thank you for meeting November 27 1996.pdf)

グリア博士は他にも数名の有力者と会談しました；しかし、グリア博士のイニシアティブを引き受け、これらの秘密裏に運営されているプログラムを調査・掌握することで憲法上の義務を果たそうとする覚悟のある者は一人もいませんでした。

この取り組みは、1997年4月にウェスティンホテルで行なわれた議会関係者向けブリーフィングの翌日まで続きました。その後、グリア博士は国防総省に案内され、当時新たにJ2（統合参謀本部情報局長）に就任した**トム・ウィルソン (Tom Wilson)** 提督へのブリーフィングを行ないました。このブリーフィングがどのように手配されたかを詳述する文書は、アーカイブで閲覧可能です。

[[文書 #115243](#) を見よ]

(\*RADM Wilson - Letter to Rear Admiral Wilson J2 introducing Dr. Steven Greer June 28, 1995 .pdf)

ウィルソン提督の関与が明るみに出たのは、とりわけ**エドガー・ミッチェル (Edgar Mitchell)** の死後、彼のアーカイブが公開されてからのことです。そこには、**ロバート・ビゲロー**（彼がビゲロー航空宇宙会社を設立する前のことです）率いる国立発見科学研究所（National Institute of Discovery Sciences; NIDS）の諜報工作員（**ライス (Rice)** 博士と思われる人物）がウィルソン提督に行なったインタビューが含まれていました。

ビゲローは、**ジョン・アレキサンダー (John Alexander)** 大佐が取り仕切る、UFO を扱う秘密プログラム一派に関与するようになっていました。

アポロ宇宙飛行士のエドガー・ミッチェルも、当時これらの問題を探求し始めたばかりだったため、主に情報収集を目的としてこの会合（ブリーフィング）に同席していました。月面を歩いた6人目の男として名高いミッチェル博士は、これらの秘密作戦について積極的に問い合わせを行っていました。

時系列的に重要な点として、この会合の少し後に、グリア博士の親しい助手であった**シャリ・アダミアク (Shari Adamiak)** が殺害されたことを記しておく必要があります。

会合に先立ち、グリア博士はクーリエ便を手配し、ネリス空軍基地とエリア 51 から入手した一連の機密文書をウィルソン提督に届けさせていました。これらの文書の中には、このテーマに関連する作戦のコードネームと番号をリストアップした国家偵察局（NRO）の文書や、未だ機密解除されていない機密配布リストが含まれていました。それはこちらにあります：

[文書 #115099 を見よ]

(\*NRO Nellis Complex distribution list Special security advisory July 28, 1991.pdf)

これに続き、統合参謀本部議長も問い合わせを始めました。これは、後にリークされた彼のデブリーファ（報告作成者）が取ったメモによって証明されています。ウィルソン提督との会合は、国防総省でのスタンドアップ・ブリーフィング（立ったまま行なう略式説明）でした。このブリーフィングの中で、ウィルソン提督は、より深く調査しようとしたところ、それ以上の情報へのアクセスを拒否されたことを明かしました。グリア博士が提供した文書には、プロジェクト名やコードワード（暗語）など、どこを調べるべきかに関する詳細が含まれていました。

[文書 #116965 を見よ]

(\*Admiral Tom Wilson memo - debriefing - October 16, 2002.pdf)

当初 45 分の予定だったブリーフィングは、提督がその後の会議をキャンセルしたため約 3 時間に及びました。その間、ウィルソン提督は多大な関心を示し、情報の持つ意味を素早く把握しました。しかし、彼はまた、個人的に降格の脅しを受けていたことも明かしました。降格になれば給与や手当が減額されることになるため、彼はこの件に関するそれ以上の議論から手を引くことになったのです。

長時間の議論の終わりに、グリア博士はウィルソン提督に協力を求めました。ウィルソンは、アクセスを拒否されたことと脅迫を受けたことを理由に、断りました。彼はきわめて重要な指摘を行ないました。B-2 ステルス爆撃機よりも遥かに進んだ航空機が存在し、それらがこの無認可グループの管理下にあるため、事実上彼らが戦略的に優位な立場にあるということです。彼はそれを知って、これ以上関与することから身を引きました。

**それは 1997 年 4 月のことでした。27 年前です。それ以来、何も変わっていません。**

グリア博士は、ウィルソン提督が高位の将校である一方、自分自身はノースカロライナ州の救急救命室（ER）とワシントン D.C. を行き来し、余暇を使ってこれらの活動を行なっている一介の救急医にすぎないと指摘し、互いの立場の違いを認めました。また博士は、自らのスタッフとは違い、自身の活動から報酬は得ていないことにも言及しました。彼は困難にもかかわらず、このイニシアティブに取り組み続けることを決意しました。

会合は友好的に終了しました。グリア博士は、身の安全を危険にさらす準備のできていない者にとってのリスクを認識し、ウィルソン提督にそれ以上の圧力をかけないことを選びました。

その後、グリア博士は、詳細を公表する前にあと数箇月間この戦略を追求し続けることを計画しました。彼は、民間機関、CIA、国防総省、FBI（連邦捜査局）を含む米国政府のあらゆる関連部署に、受取証明付きで手紙を送付しました。

その手紙は“特段の指示がない限り（Unless-Otherwise-Directed; **UNOD**）”という形式のもので、グリア博士が軍事関係者から学んだ軍事プロトコルでした。そこには彼の評価（見解）が述べられており、特段の指示がない限り、予定されている行動を進めることが示されていました。この形式の手紙は、事実上、意図されている行動について受取人に通告するものです。

その手紙の中で、グリア博士は、大統領、国防総省、あるいは司法省やFBIの関連部署から反対の指示がない限り、彼と彼のチームは1998年1月から、米国政府を迂回して市民への情報公開（public disclosure）を開始すると述べました。

[文書 #116969 を見よ]

(\*President Clinton and Cabinet given January 1997 deadline Unless Otherwise Directed (UNOD) National Security Oaths for Witnesses are null.pdf)

こうしてこのイニシアティブは、“プロジェクト・スターライト”から移行した現代の“ディスクロージャー・プロジェクト”の誕生を告げたのです。このプロジェクトにより、これらの問題に関する公開討論において“ディスクロージャー（情報公開）”という用語が、広く使われるようになりました。この用語は、グリア博士がこの公共のプロジェクトのために使い始めたものです。

1998年から2000年にかけて、グリア博士はネットワークを広げ、内部告発者を集め続けました。最終的に、彼らは約100名のグループになりました。グリア博士は彼らにインタビューを行ない、それをフィルムに収めることができました。そしてこのことが、**2001年5月のナショナル・プレスクラブでのイベント**へと結実したのです。

[文書 #115434 を見よ]

(\*The Disclosure Project - National Press Club event May 9, 2001 full video.jpg : このときのビデオの日本語完訳が館野洋一郎氏のウェブサイトに掲載されている：<http://ettechnology.web.fc2.com/video.htm>)

**このイベントは8億人を超える人々に視聴されました。**その献身的な姿勢で知られるグリア博士は、このイベントを開催すると約束し、それを実行に移しました。当時、プロジェクトはオフィスを持たずに運営され、完全にボランティアによって支えられていました。この状況は現在もほぼ変わっておらず、スタッフはわずか2名です。

このイベントは、連邦議会への“行動の呼びかけ”であり、より多くの内部告発者が名乗り出るよう求める嘆願でもありました。2023年までに、アーカイブは750名の潜在的証人および内部告発者を含むまでに拡大しました。匿名を希望した人々については、その名前は伏せられ、5桁のコードに置き換えられています。

1992年から2001年までのこの期間における**重要な教訓は、政府当局に適切に行動するよう求める徹底した努力にもかかわらず、彼らが一貫してその義務を果たさなかったということです。**その結果、民間人、愛国者、憂慮する地球市民で構成されるグリア博士と彼のグループは、自らの手で事態を動かすことを決意しました。

彼は、**ジョージ・W・ブッシュ**（\*ブッシュ・ジュニア）、**バラク・オバマ**、**ドナルド・トランプ**を含む、その後の歴代米国大統領に対してブリーフィング（状況説明）を行ないました。これらすべての大統領向けブリーフィング資料と包括的な文書は、アーカイブに保管されています。

連邦議会議員への働きかけやネットワーク作りの努力も、少しずつ続けられました。

2017年、ドキュメンタリー映画“Unacknowledged（認められざるもの）”が公開されたことで、重要な進展がありました。これは、これらの問題に注目を集める上での、もう一つの転換点となりました。

このドキュメンタリーは、世界中で約7億8000万人の視聴者に届きました。これはクラウドファンディングによって制作された告発作品で、証人へのインタビューや目下の問題に関する詳細な報告が含まれており、約1時間40分の作品として瞬く間に拡散しました。

しかし、その成功は、秘密裏に活動する違法な政府内グループからの激しい反発を招くことになりました。ドキュメンタリーの影響力が増し、この問題に対する人々の認識が変わり始めると、このグループは対抗策として**トム・デロング（Tom DeLonge）**を前面に押し出しました。デロングは、かつて“**ブリンク 182（Blink-182）**”の若いロックアーティストだった頃に、グリア博士が指導していた人物でした。デロングは最終的にグリア博士のプロジェクトから離脱し、**ルイス・エリゾンド（Luis Elizondo）**と手を組みました。エリゾンドは、この問題に関する元国防総省の防諜スペシャリストでしたが、今度は彼が“**ディスクロージャー**”の看板を背負うことになったのです。

しかし、その真の意図は、完全な真実から物語を逸らし、代わりに“**部分的な真実**”に焦点を当てることでした：

- 1) 未確認空中現象（Unidentified Aerial Phenomena; UAP）の存在は認めるが、技術的な理解はできていないと主張する。
- 2) これらの物体の正体に関する知識を否定する。
- 3) そのような技術の保有を否定する。
- 4) これらの現象を国家安全保障上の脅威として位置づける。

エリゾンドは極めて熟練した作業者であり、1962年のピッグス湾事件のような重要な諜報事件と歴史的なつながりを持つ人物たちによって訓練を受けていました。エリゾンドがメディアで台頭したことにより、彼の UFO サブカルチャーへの浸透と影響力の行使が進められました。

ドキュメンタリーの公開後、サンディエゴ沖で発生した **2004 年の “チックタック (Tic Tac) ” UFO 事件** が広く報道されるなど、いくつかの重要なリーク（情報流出）が発生しました。これらのリークは連邦議会による調査を促し、主に上院軍事委員会と上院情報特別委員会が主導する形で、これらの現象の調査を目的とした予備的法案が 2000 年代初期に可決されました。

数年前、**ワーナー (Mark Robert Warner)** 上院議員と**ルビオ (Marco Rubio)** 上院議員が主導する上院情報委員会の上級スタッフたちが、グリア博士に接触してきました。軍事基地や企業による 1 年間の情報遮断を受けた後、彼らはグリア博士をワシントンに招いたのです。

何人かを伴って**スキップ (Sensitive Compartmented Information Facility; SCIF ; 機密区画化情報を処理したり話し合ったりするための閉鎖された部屋)** に入ったその上級スタッフは、進展が見られないことへの不満を露わにしました。彼はグリア博士に、何が提供できるかを訊ねました。グリア博士は、彼らが調査を進めるために必要なあらゆる情報を提供すると申し出ました。

その後、長時間の会議が行なわれました。上院情報委員会のために行なわれたこれらの会議は、約 3 時間に及びました。それは非常に中身の濃い、衝撃的なものでした。グリア博士は、委員会メンバーのために必要な情報をすべてまとめることを確約しました。救急医としての役割を引退し、正式なスタッフやオフィスを持たない身であるにもかかわらず、彼は可能な限りの資料を整理することを約束し、関連するすべてのカテゴリーをリストアップし始めました。

ワーナー上院議員は、この情報を切実に必要としていると表明しました。それ以来、グリア博士は上院情報委員会および軍事委員会の上級メンバーと協力しており、最近では**ルナ (Anna Paulina Luna)** 議員、**バーチェット (Tim Burchett)** 議員、**モスコウィッツ (Jared Moskowitz)** 議員を含む下院監視委員会のメンバーとも協力しています。

しかし、2024 年 3 月の時点で、最初は 1993 年に、そして再び 2005 年に要請された、これらすべての内部告発者に対する召喚状を伴う公聴会は、いまだ手配されていません。

内部告発者のリストは増え続けており、数週間ごとに新たな人物が名乗り出ています。この進行中の新しい情報流入により、アーカイブは絶えず拡大する “生きた実体” となっています。

このイニシアティブ（先導的取り組み）は、最終的に **“ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ（Disclosure Project Intelligence Archive; DPIA）”** の創設につながりました。これは、入手可能なすべての情報を提供しようとするグリア博士に求めた、上院情報特別委員会および軍事委員会からの要請に応じて開発されたものです。

グリア博士は、すでに編集されていた評価分析書や大統領向けブリーフィング資料（**トランプ（Trump）** 大統領のために準備された文書や、**ペンス（Pence）** 副大統領とトランプ大統領のために作成された秘密のビデオ・ブリーフィングを含む）を提供することを申し出ました。

2, 3 年前に遡ると、**会計検査院（GAO）** の約 30 名とアラバマ州を拠点とする民間請負業者が、議会、上院、軍の予算を通じて秘密裏に資金提供を受け、グリア博士と協力する計画がありました。目標は、情報委員会、ホワイトハウス、およびそれらと連携する連絡窓口、さらに国防総省や CIA 内の支持者を含めた関係者がアクセスできるように、コンテンツ（利用可能情報）を徹底的に整理しデジタル化することでした。グリア博士は彼らと協力することに同意しましたが、計画は最終的に阻止されました。

この挫折の後、情報が依然として決定的に必要とされていることを認識していたグリア博士は、独力でこの任務を引き受けることを決意しました。

チーム（非常に小規模で、有給スタッフとボランティアで構成）は、膨大な量の情報を整理し始めました。その後、彼らはアーカイブを機能的で検索可能、かつアクセスしやすいものにするための実用的なアプローチを見つける必要がありました。もし米国政府が十分な資金を計上していたなら、適切な人員配置と実行のために、おそらく 1000 万から 2000 万ドルが投入されたことでしょう。

グリア博士はアプローチを変え、なぜこのような重要情報がワシントンの官僚や政治家だけに限定されるべきなのかと考えました。たとえ下院監視委員会や上院情報委員会が今日、すべての内部告発者との徹底的な公聴会を開始したとしても、アーカイブが提供するものの一部をカバーするだけで 1 年以上かかるでしょう。

彼は、アーカイブを世界的に、地球上のあらゆる個人がアクセスできるようにすることを決めました。これは、グリア博士がシナイ半島に住んでいた頃に学んだベドウィン（\*アラブ系遊牧民）の格言です：“神を信じよ、だがラクダはつなげ（\*神に頼るだけでなく、自分自身も努力せよ）” この文脈において “ラクダをつなぐ” とは、情報を世界中で利用可能にすることを意味します。

この情報公開イニシアティブ（disclosure initiative）の原動力となるのは、メディアでの認知がどうあれ、本来あるべき立憲共和制民主主義における、市民の“知る権利”です。

課題は、何百万人もの利用者による同時アクセスを容易に処理することができ、膨大なコンテンツを簡単にナビゲートできるウェブサイトを開発することでした。理想を言えば、このようなプロジェクトには 500 万から 1000 万ドルの資金と、完成までに数年の歳月が必要でしょう。資金不足と人員不足にもかかわらず、彼はこの任務を完遂することを決意しました。

また、いかなる政府や企業によっても侵害されたり、閉鎖されたりしない、安全なホスティングソリューション（ウェブサービス）も緊急に必要とされていました。これはサイトの永続性を確保するためにきわめて重要です。

**ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ（DPIA）**には、20 のカテゴリーにまたがる約 9,000 のファイルが含まれており、各カテゴリーにはさらにサブカテゴリーが設けられています。これらのファイルの一部は膨大で、数百ページから数千ページに及ぶものもあり、800 本を超えるビデオには、数時間にわたるプレゼンテーションから UFO の短いクリップまでが含まれています。

これらのファイルは、光学式文字認識（OCR）を通じてアクセス可能になっており、特定の検索欄を使って素早く検索することもできます。このような膨大な文書群を管理するためには、ファイルを開き、内容を解釈して書き起こし、検索欄を使って即座に検索できるように、手で記述子（ディスクリプタ）を挿入する必要があります。この途方もない作業には、かなりの時間と人手が必要であり、信頼できるボランティアチームに大きく依存しています。

構造的に、DPIA（ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ）には、以下を含む利用者向けの“フロントエンド（ユーザーインターフェース）”が設けられています：

- **DPIA インテリジェンス・ブリーフィング・モジュール**
- 闇の予算
- **第五種接近遭遇（CE5）**
- **違法な政府の偽旗（False Flag）プログラム**
- **主要な歴史的イベント（キャッシュ-ランドラム事件の報告書やブリーフィングなど）**
- **大統領向けブリーフィング**
- **議会向けブリーフィング**
- **アシロマ会議**
- **現在までに判明しているすべての UFO 墜落回収事件（主要な約 130 件）**
- **政府文書（米国および旧ソ連を含む十数カ国のもの）**
- **UFO 関連秘密施設の場所**
- **UFO のビデオと写真**
- **すべての目撃者および内部告発者の証言**

一つの重要な課題は、グリア博士の個人ファイルに含まれる個人情報を編集（黒塗り）する必要があったことです。これには、氏名、メールアドレス、電話番号の他、軍の除隊証

明書 (DD-214 フォーム) に見られる社会保障番号などの機密情報が含まれます。そうすることで、市民、連邦議会議員、ホワイトハウスのスタッフに公開されるすべての情報において、関係者のプライバシーを保護するための適切な編集が施されていることが保証されます。

この**編集済みアーカイブ**の作成に際しては、情報源自身によって一般市民への公開が了承された情報のみが利用可能になるよう徹底しました。公開されている氏名は、名前の使用を明示的に許可した個人のものだけです。

もしある人物にとり具体的な詳細を知ることが本当に必要である、そうグリア博士が判断した場合、その人物には、黒塗りされていない、慎重に精査された本物の情報へのアクセス権が与えられます。例えば、ある“X 上院議員”が真の関心と誠実さを示し、グリア博士が彼やそのスタッフとの直々の面会や交流を通して、それを単なる好奇心ではなく真面目な意図によるものであると判断した場合、博士はその上院議員が秘密を守ると信頼した上で、要求された完全な情報を提供します。

きわめて重要な立場にある人物をも含め、多くの証人が、自らの命をグリア博士に預けています。これらの証人の約 80 名から 100 名は実名が公表されており、彼らの証言や文書の類はすべて、個人を特定できる詳細情報を削除した上で、一般に公開されます。

その他の証人については、メールやメモを通じて共有された情報はアーカイブに含まれますが、彼らの名前は公開の明示的な許可が得られるまで秘密のままとなります。

皮肉なことですが、グリア博士はグローバル・ディスクロージャー・プロジェクト (Global Disclosure Project) の創設者として、彼が知っていることの約 90% を秘密にしています。これは彼に寄せられた信頼を守るためです。この必要性は、彼の組織内および個人的な内面の両方において葛藤を生み出しています。

グリア博士は、市民には“ありのまま (warts and all)” の情報にアクセスする権利があると固く決心しています。**編集 (黒塗り) のプロセスは現在も進行中であり、公開されている DPIA (ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ) のすべての情報を明確かつ効果的に提示するためには、依然として大幅な整理が必要です。**

最優先の文書 (Top Priority Documents) と個人は、サブカテゴリー 1 にラベル付けされています。このカテゴリー内の残りの項目は内部告発者の出身国別に整理されており、その大半は米国からのものです。

[[文書 #115482](#) を見よ]

(\*Witness List 7-10-2024.pdf)

証人リストに目を向けると、最初は名前が表示されていますが、その後はコード番号（\*実際には黒塗り）に切り替わり、それが数ページにわたって続きます。このリストは、証人が語る内容について説明しています。

市民は、グリア博士の手書きのメモやデブリーフィング（聴き取り）記録を含む、この包括的かつ生の情報にアクセスできるようになります。

具体的なカテゴリーに加えて、“**一般ブリーフィング (General Briefings)**” があります。これらはアーカイブ内の他のカテゴリーとは直接結びついていませんが、次のような、より広範な問題を扱っています：

- **機密保持の方法**
- **防諜（カウンターインテリジェンス／対諜報活動）で使用される技術**

これらの側面は、全体像を理解するためにきわめて重要です。特に、連邦議会、大統領、あるいは国家安全保障会議（NSC）のメンバーは、これらの問題について十分なブリーフィングを受けておらず、また“読み込まれて（read into）” もいないため、理解が不十分だからです。

現在の NSC には包括的な概要ブリーフィングが必要です。アーカイブにおけるこのカテゴリーの重要性が強調される理由もそこにあります。しかし、これは主にテキストと情報で構成されているため、グリア博士は、その評価分析を裏付ける文書や事例にリンクさせることで、内容を充実させることを目指しています。

グリア博士は、1993 年に CIA 長官のために初めて行なって以来、インテリジェンス評価（情報分析）の作成に熟達しています。彼の 31 年間の経験にもとづき、これらの評価はプロジェクトの不可欠な部分となっており、ブリーフィング中に行なわれる対話の重要性を強調するものにもなっています。

これは、未確認空中現象（UAP）、UFO、地球外知性体に関するすべてのデータをデジタル化して収集し、これらのトピックに関する“ウィキペディア”のようなものを作り上げるという、グリア博士のより大きな目標の一部です。

この巨大な取り組みは困難をきわめています。**グリア博士は、アーカイブを完璧なものにするには 1 年かかるかもしれないと認めた上で、状況の緊急性と今日の世界の複雑さゆえに、完璧さよりも前進が必要であることを強調しています。**

2023 年 12 月、国防総省の予算関連法案である**国防権限法（NDAA）**は、重大な問題に直面しました。グリア博士は、上院情報委員会と軍事委員会の両方を無事に通過した法案の起草において、重要な役割を果たしていました。

**この法案は、認可されていないプログラムに関与する航空宇宙企業、請負業者、および個人に対し、法案の通過から 6 箇月以内に、地球外知性体の遺体や宇宙機を含むすべての資料を公開することを義務付けるものでした。**

それは上院では圧倒的多数で、上院情報委員会では全会一致で承認されました。

グリア博士の強い主張により、この法案は恩赦条項が盛り込まれた状態で委員会から提出されました。これは、これら違法プログラムの参加者が名乗り出るための期間を設け、憲法上の監視に沿って、大統領と議会により認可・監督される事業へと移行することを可能にするものでした。

法のないところに文明はありません。

しかし、上院と下院の間で行なわれた両院協議会での交渉中に、**下院の主要人物たちがこれらの重要な規定を阻止し、国防権限法から削除してしまいました。**グリア博士はこれを政治的腐敗（買収）によるものだとしています。責任者たちは特定され、FBI/SWAT チーム（FBI Special Weapons and Tactics Teams ; FBI の特殊部隊）に通報されました。これは脅しではなく、法的執行の約束として行なわれたものです。

グリア博士は、これらの問題が、ホワイトハウス、国家安全保障会議、議会の支援を受けた、召喚状を伴う公開公聴会を通じて対処されることを望んでいます。これが、過去 31 年間にわたる彼の一貫した要求です。

2023 年 10 月、グリア博士は命を落としかけるほどの重傷を負い、これらの問題を取り巻く緊急性は一層高まりました。身体的な外傷（トラウマ）にもかかわらず、彼は依然として精力的にこれらの提唱活動に関与し続けています。

ホワイトハウス、連邦議会のスケジュールや行動をコントロールすることは不可能ですが、市民が知っておくべき、これらの問題に関連する重要な進展があります。それは、現在進行中の課題と、これらの問題の扱いにおける大きな変化の可能性を明確に示すものです。

2023 年 4 月、ある高位の特殊部隊将校が、ET 宇宙機、遺体、技術を保管する様々な施設を確保し、それらを違法に運営している組織を解体するため、米国本土内で“法執行打撃チーム”を設立する任務を負いました。

グリア博士は、体系的かつ法に則したやり方で、連邦議会に関与するよう努力してきました。しかし、その将校が自身と国防総省の同僚たちの不満を表明したことで、事態は大きく展開しました。彼らは自分たちを“持たざる者（have-nots）”と自認していました。彼らは、指揮系統の中にあって“チーム・ブルー”と呼ばれる、合法的な政府の活動を支持する人々でした。そして、議会やホワイトハウスからの妨害行為に対して、ますます不満を募らせていたのです。

その特殊部隊チームには、深部の地下軍事基地や隠された設備・資産の場所を含む、これらの秘密作戦に関与するすべての関連施設および人員に関する、黒塗りなしの包括的な情報が提供されました。この情報は、認可されていない、あるいは違法な行動の一部としてではなく、チームが認可された介入を行なう準備を促進するために提供されたものです。

その計画とは、関与するすべての施設を断固として管理下に置くことです。この作戦のリーダーは、6月のナショナル・プレスクラブでのイベント（\*2023年6月）の1箇月後にグリア博士を訪問しました。彼は、必要とあらば致死的な武力を行使する準備ができていることを述べて本気度を示し、彼らの部隊を象徴するピンバッジをグリア博士に贈呈しました。それは、彼らの作戦範囲が世界的かつ秘密裏であることを示していました。

2024年3月までに、グリア博士は連邦議会に対し、以下の主要防衛請負業者からの協力を法的に義務付けるよう働きかけました。

- ・ **ロッキード・スカンクワークス (Lockheed Skunk Works)**
- ・ **ノースロップ・グラマン (Northrop Grumman)**
- ・ **ボーイング (Boeing)**
- ・ **レイセオン (Raytheon)**
- ・ **E-システムズ (E-Systems)**
- ・ **サイク (SAIC)**
- ・ **イー・ジー・アンド・ジー (EG&G)**

このイニシアティブは当初支持され、訴追の可能性を伴う6箇月間の遵守期間を義務付ける法律として署名されました。しかし、この指令は最終的に2023年12月末までに下院内で削除されました。

連邦議会議員、ホワイトハウス、軍関係者は、もし法的ルートが塞がれ続けるならば、これらの特殊部隊が独自に行動を開始する可能性があることについて、グリア博士から直接知らされています。このアプローチは理想的ではありませんが、問題に合法的に対処する方法が失敗し続けている現状を鑑みれば、必要な対応であると見なされています。

事態の重大さは、いくら強調してもしすぎることはありません。この行動方針は極端ではありませんが、これらの機密プロジェクトに関連した違法活動に対処する、残された数少ない選択肢の一つなのです。

2023年6月にワシントンで行なわれたナショナル・プレスクラブ・イベントの1箇月前、UFOに関連する無認可の秘密政府プログラムにおいて NOC (non-official cover ; 政府から保護されない非公式諜報員) として活動する高位のスタッフが、グリア博士に接触しました。この人物はこれらの作戦に深く関与しています。グリア博士は彼の施設を訪問し、秘密の場所の上空を飛行して、彼らの作戦に関する包括的な洞察を得ました。

その作業者と彼のグループは、ワシントン、特に連邦議会とホワイトハウスによる度重なる遅延と不作為に対し、極度の不満を募らせています。彼はその状態を、“職務放棄 (missing-in-action ; MIA)” と表現しました。国家安全保障会議 (NSC) とは多少の進展がありましたが、議会の遅いペースと無能ぶりには苛立ちが続いています。

ある匿名議員へのブリーフィング後、ある FBI 捜査官がグリア博士に “**レッドフラッグ (Red Flag ; 要注意人物)**” のレッテルを貼り、その議員に対して博士の情報を無視するよう警告しました。これは、このグループが米国政府内の通信に対して持っている強力な監視と支配力を反映しています。

その作業者のグループは、グリア博士や彼のチームと緊密に協力しています。また、これらの特殊部隊員が、機密扱いではあるものの、認可された資格で国内での戦闘任務に就くための移行措置が計画されています。この移行には、標的となる施設を合法的かつ秘密裏に攻撃するための、軍からの離脱が含まれています。

グリア博士はまた、現状に憤慨しているリーダー格を含む “**深部の離反者 (deep defectors)**” のグループとも関わりを持っています。彼らは “**カタストロフィック・ディスクロージャー (catastrophic disclosure ; 突然で破壊的な情報公開)**” と呼ぶものを検討しており、これには死亡した地球外知性体の遺体や宇宙機の回収を記録した、回収チームの GoPro カメラ映像など、すべての情報を公然と発表することが含まれます。この資料はアーカイブに含まれる予定です。

最近の重要な進展として、グリア博士は法執行活動の責任者からメッセージを受け取り、FBI が内部告発者に保護を提供することに同意したとの通知を受けました。

これらの無認可プログラムに関与している別のグループは、自分たちの活動が地球にもたらす倫理的な問題や潜在的な危険性について、深く憂慮しています。

かつてエリア 51 として知られるネリス施設で働き、S4 チャンバー内の通信監視を担当していたある人物は、恒星間通信の傍受も行なわれていることを明らかにしました：

**地球外宇宙機やその乗員に対する攻撃的な行動を続けると、地球外知性体たちが被害を軽減するために地球に直接介入する事態を招きかねない、というメッセージが伝えられています。**

議会が管理に失敗している “制御された情報公開 (controlled disclosure)” からエスカレートしたこのシナリオは、より “**キネティック (kinetic)**” かつ暴力的な結果につながる可能性があります。“**キネティック**” とは軍事用語で暴力を意味し、米国本土において、デルタフォースやグリーンベレーのような異なる精鋭軍事グループ間での衝突の可能性を示唆しています。

グリア博士はそのようなシナリオを防ぐために積極的に活動していますが、彼の警告は聞き入れられていません。進展の遅さに不満を抱き、差し迫ったリスクを認識しているこのグループが、独自に機密情報の大規模かつ無計画な一般公開を開始する可能性は十分にあります。グリア博士はこのグループと常に連絡を取り合っており、きわめて大きな混乱を招きかねない情報公開の準備を進める彼らに、必要な情報を提供しています。

**状況はきわめて差し迫っています。**これらの内部関係者たちは、何もしないことによって起こり得る結末を考慮すれば、状況を是正するための緊急行動が必要であると信じています。急速に迫りつつあるものは何か、それを関係者が認識していることは明らかです。彼らは、現在のタイムラインが、これらの問題を解決しなければならない重要ポイントに達していることを理解しています。それは多くの人々が認識しているよりも緊急を要することなのです。

問題なのは、生物圏の崩壊、汚染、世界を変える技術の隠蔽だけではありません。稼働中の高度な兵器システムの存在が問題なのです。これらのシステムは、ET 宇宙機の誘導システムにロックオンして操作し、**電磁パルス (EMP) 兵器**や**スカラー兵器**によって無力化できる“攻撃圏 (strike zones)”へと誘導する能力を持っています。

グリア博士はこれらの作戦を直接目撃しており、核拡散防止条約に違反するこれらの違法電磁パルス (EMP) 兵器の証拠映像を所有しています。彼は事故の直前、2023 年 10 月に、この映像を上院情報委員会のメンバーに提供しました。

30 年以上関与してきたグリア博士の視点から見れば、現在の状況は解決を迫られる“転換点”にあります。**もし政治指導者たちがこれらの問題への対処に失敗し続けるならば、権限は必然的に彼らから奪われることになる**、そう彼は信じています。

これらの懸念は数名の連邦議会議員に対して直接、繰り返し表明され、事態の深刻さと、即時かつ真剣な行動の必要性が強調されています。大きな変化がなければ、支配権は従来政府組織から離れ、その結果は深刻なものとなるでしょう。

議会の公聴会以外に、三つのシナリオが展開する可能性があります：

- ・ **元特殊部隊員のみで構成された法執行チームによる急襲 (ストライク)**
- ・ **秘密の違法プログラムの内部関係者によるカタストロフィック・ディスクロージャー**
- ・ **地球外知性体による直接介入**

これらの地球外知性体に敵意はありませんが、彼らの宇宙機や仲間に対する継続的な攻撃的行動を彼らが容認することはありません。そのような介入は、**1940 年代に始まった攻撃**がなおも続くことを許さないという、地球外知性体の拒絶によるものであり、彼らの忍耐が限界に達していることを示すものです。

現在の人類の技術は、単に地球の大気圏に進入してくる知性体に対してだけでなく、他の世界に対しても存亡に関わる脅威をもたらすほどに進歩しています。このシナリオは、グリア博士、特殊部隊員、トップクラスの内部告発者、違法プログラムからの離脱を考えているグループによって、最悪のシナリオとして認識されています。

グリア博士のドキュメンタリー映画 “The Lost Century (失われた世紀)” のプレミア上映中、博士の警護に配属されたある特殊部隊員が、大統領が使用するものに似た重装甲車両で彼を迎えに来ました。この人物はリーダーではなくチームの一員でしたが、秘密の違法部門に囚われ、解放を求めている人々を助けようとするグリア博士の努力に対し、感謝の意を表しました。

興味深いことに、“抑圧からの解放” というラテン語のモットー “De Oppresso Liber” で知られる陸軍特殊部隊チームも、同様の心情を表しています。

2024年3月現在、これらの進展の結末は不透明なままですが、グリア博士は、これらの出来事が持つ不穏な性質を認めつつ、状況についての更新を続けています。

最近メキシコで、議会の会期中、政府が特定の遺物を“ただの人形”として退けた事件がありました。これはユーフォロジー (ufology ; UFO 研究界限) において防諜活動がいかに行なわれているかを示す典型的な例です：信頼できる証拠が訓練された職員によって不当に扱われ、滑稽なものに見せかけられ、情報の信用を落とすために利用されるのです。

この戦術は何十年も前から使われています。“ナショナル・エンクワイアラー (National Enquirer) 紙” の創設者である **ジェネローソ・ポープ・ジュニア (Generoso Pope Jr.)** は、CIA の心理作戦 (PsyOps) スペシャリストであり、マフィアの資金を使ってタブロイド紙を設立しました。この戦略により、重要な UFO の話題であっても、ナショナル・エンクワイアラー紙 と関連付けられれば、その出版物の評判のせいで否定される可能性が高くなり、情報の信頼性が損なわれることが保証されるのです。

NSA (国家安全保障局) 長官だった **オドム (Odom)** 将軍の右腕となる人物が、数年前にグリア博士と面会し、“**マリリン・モンロー文書**” を本物であると認証しました。そこには、なぜマリリン・モンローが翌日 (\*文書の日付の翌日) 殺害されることになったのかが概説されています。この NSA の関係者は、文字どおり手錠で自身に繋がれたブリーフケースを持ち歩いていました。

[[文書 #116656](#) を見よ]

(\*CIA Marilyn Monroe document August 3, 1962.pdf, CIA Marilyn Monroe August 3, 1962 re-typed.pdf)

退役後、オドム将軍は諜報界限で使用される “**DDT (Decoy, Distract & Trash ; おびき寄せ, 気を逸らし, 破壊する)**” として知られる欺瞞戦術について説明しました。これ

は、関心のある実際の問題から注意を逸らすために“おとり”作戦を仕掛け、その後それを信用できないものとして破壊（否定）するというものです。

このDDT戦術は、ペルーのナスカで発見された“ナスカのミイラ”にも適用されました。その手口は、墓泥棒が遺物を仲介者に渡し、その仲介者がそれらのアイテムを、UFO 界限でおふざけやペテン師として知られる人々の手に渡るようにする、というものでした。

ナスカのミイラは、もともと7年前にナスカの地上絵近くで発見されました。異常に大きな頭蓋骨や手を持つものを含め、60体以上のミイラ化した遺体が発見されています。それらは1000年から6500年前のものとして、6つの異なる種に分類されています。

これらのミイラの中には、身長約18インチ（約46cm）と著しく小さいものもあれば、14インチ（約36cm）の手を持ち、身長が10から12フィート（約3から3.6m）あったと推定されるものもあります。これらの発見物には金属製のインプラントも含まれており、分厚い珪藻土の層で覆われていました。これは、それらが単一の墓ではなく、網の目状に広がる地下墓地（カタコンベ）に埋葬されていたことを示唆しています。

[[文書 #127525](#) を見よ]

(\*The Miles Paper re Peruvian Tridactyl Mummies 2022-10-13.pdf)

最近、ミイラの大規模な一般公開に続き、グリア博士はテネシー州選出のバーチェット下院議員と共に、あるニュース番組でこれらの発見について議論しました。意見を求められた際、バーチェット議員はこの発見を“でっち上げ（捏造）”として一蹴しました。

対照的に、グリア博士は自身の科学的かつ医学的背景に基づき、DNA 検査結果、CAT スキャン（CTスキャン）、解剖学的切開など、さらに多くの証拠が出るまで判断を保留し、証拠に基づいて結論すると強調しました。彼の慎重かつ事実に基づく返答は、この規律あるアプローチを示すものです。これは通常、UFO 研究家（ユーフォロジスト）とは結びつかないものです。グリア博士はこのレッテルから距離を置き、代わりに自身の実質的な医学的実績によって認知されることを好んでいます。

残念ながら、この分野の多くのトピックと同様に、情報が一般市民に届くと、科学的観点からはお粗末な分析や、情報の信用を落とすのに一役買う危険な“おどけ（道化芝居）”の対象となってしまうことがよくあります。

結論として、もしナスカのミイラが本当に実在する地球外知性体であるならば、“キネティック（武力行使を伴う）”な法執行打撃チームの急襲によって、地下墓地から新たな遺体や宇宙機を回収する必要はなくなるでしょう。

（訳：廣瀬 保雄）